

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ① 日本地理教育学会

(代表者 井田 仁康 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

## 地 理 A

### 1 前 文

本年度は共通テストの2年目にあたる。共通テストの問題作成方針は2020年1月に大学入試センターから示されている。問題を検討するにあたっては、この方針をもとに①思考過程、②知識をもとにした推論、③資料の活用などの観点から小問ごとに評価した。授業の場面設定や学習過程を意識した問題も増えていることを踏まえ、大問全体の構成や流れなどについても検討をおこなった。

問題総数は昨年4問減少したが、今年も同様に30問である。より深い地理的思考力を問うたり、資料読解が増えたりしたためであろう。5大問構成とおおよその出題分野も変更がなかった。

### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 昨年度は「地図とGIS」を全面に押し出した大問であったが、今年度は従前と同じように自然地理学的な部分をベースにしそれに防災の意識を加え、「地図とGIS」を絡めて地理の基礎的事項を問う出題となった。問1から問5までで地図を主体とした小問として、最後の問6の小問の文章でこれらのまとめを行うことで大問の一貫性をなしている構造は昨年と同様である。地理院地図、等値線図、メッシュマップ（階級区分図）、火山ハザードマップ、断面の模式図と、昨年はデータソースの点で「地図とGIS」の基本を網羅していたのに対して、地形図、メッシュ、ハザードマップなど広く地図を集めており基本を網羅しているといえる。また、一般図の読み取り、主題図の重ね合わせや空間分布の読み取り、地図と現地（写真）との照合など一通りの読図の技法を扱っており、大問全体としてもバランスがよい。次期学習指導要領の「地理総合」と関連しており、この大問を解くこと自体がよい学習ともなる。

問1 地理院地図を使って読図力を問う出題である。琵琶湖北岸で扇状地と三角州を一枚にとらえる図取りがとても興味深い。内容は基本的なものでありこの大問の最初に置くにはふさわしい良問である。地理院地図中の名称などの加筆や修正には若干の違和感があるが、大谷川の的確な位置とモノクロのため判別しにくい国道など選択肢で述べている文章を的確に表現するためであり、問題成立のためには必要である。

問2 地形（起伏）と気候（気温）のそれぞれの事象をGISの基本の一つである地図中でのレイヤリングによって、現象（フェーン）の特徴と場所（関東地方）の両面を組み合わせさせて考察させる良問である。傾向面を表現する等値線は読図作図の両面からぜひ学んでほしい技能であり、このような出題はとて望まれる。

問3 いわゆる“狭義の「地図とGIS」”ともいえる出題である。メッシュで人口を階級区分して表現し、これをもとにしてグラフとの兼ね合いを考えながら読み取り（公共施設配置）を行うという解答には深い思考力が要求される高度な出題であり良問である。このような問題の作問には多大な労力がかかることと思われるが、今後も継続してこのような出題を行ってほしい。

- 問4 上空からの斜め写真とハザードマップとの照合が要求されている。地図利用の基本をベースにした出題である。この地図と現地との照合は地図利用の基本であるが、簡単ではない。こうした照合ができることによって地図を実用的に利用できるようになり、また空間的思考は高まる。3つの組み合わせから答える解答方法もよく練られており良問である。
- 問5 近年多発する土砂災害の要因を模式図化した良問。シンプルな図の中のに的確に事象を表現している。
- 問6 選択肢の文章を昨年同様に前述の問1から問5の一連の出題のまとめに使っている。文章の正誤を問う単純な形式の出題方法を実に効果的に使っている。良問である。
- 第2問 世界の生活・文化に関する大問。すべての問題に分布図、グラフ、統計資料、写真を用いている。単に知識を問うのではなく、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢は評価できるが、問い方に工夫が必要な設問がみられた。
- 問1 図を読み取る設問形式ではあるが、最終的に知識の有無が解答の決め手となる。もう少し図から読み取れる事象を問うようにするなど、設問形式にもう一工夫ほしい。
- 問2 3地点は自然環境の違いがはっきりしており、グラフもわかりやすく判別しやすい。家畜の性質と気候との関連をふまえた良問である。
- 問3 教科書レベルの問題である。自然環境と生活との関連を扱った地理Aらしい出題といえる。
- 問4 写真を用いた設問形式ではあるが、キャプションがなければ都市の特徴をつかむのは難しい。写真自体から読み取れる事象を問うような設問にしてほしい。また、気候等、自然環境の特徴を問うているので、写真に加えてシバームの位置は地図上に示してほしい。
- 問5 地理Aの学習内容からみて、写真の建築物がカトリックのものであると判断するのはやや難しいかもしれない。カトリック建築の特徴がわからなくても、サグラダ・ファミリアを知っていれば解答できる。建築物の特徴を問うならば、建設中のものは避けたほうが良いと思われる。問い方は工夫されているだけに、写真が適切であれば良問となったであろう。
- 問6 標準的な難易度の問題。オーストラリアにおいて、物や人の移動でアジアとの結びつきが強まっていることは、基礎的な知識である。
- 第3問 東アジアに関する問題である。地理総合での学びを意識して課題探究型の出題になっている。気候と食文化、農業生産、貿易、旅行行動についての基本的な問いではあるが、思考力を問おうという意図は明確になっている。また、写真や地図、グラフといった資料を活用しており、地理学習の技能を強く意識しており、この点でも評価できる。
- 問1 気候に関する問題。地名だけでなく地図上の位置が示されているところに配慮を感じる。良問である。
- 問2 農業生産や宗教ともかかわらせており地理Aらしい問題。写真を基にした問題であるが、この写真から食材等を類推することは不可能。写真をカラーにするなど鮮明にすれば、よりよい問題になる。
- 問3 食生活の変化を問う問題。受験生にとって初見のグラフかもしれない。韓国を示したうえで日本と中国、米と小麦を聞いており、思考力をはかる問題として評価できる。
- 問4 この形式の図はセンター試験でもしばしば出題されている。生徒の勉強(努力)をみるという点では、こうした問題も必要であろう。
- 問5 サービス業に関する貿易を扱っているところに工夫がみられる。生徒にとってはK-POPアイドルの活躍などから考えることができる。日常生活と地理学習が結びついていることを示す良問といえる。

問6 地図とグラフの読み取り問題。受験生にとって初見のデータであったとしてもこれまでの学習で得た知識と技能があれば解答可能である。地理学習の方向性を示す問題として評価できる。

第4問 食料、都市、環境、資源、文化に関する地球的課題について、資料をもとに事象の地域的な傾向性、発生する背景、事象間の関係性を問うた大問である。すべての問題で図や表が用いられた。それらを地理的な知識や概念、見方・考え方を働かせて考察させており、思考力を問えた良問であるといえる。一方で、次期学習指導要領の内容を見越して、問いを立てての考察や、地球的課題そのものを取り上げての探究、課題に対する解決策の構想を問う問題は見られなかった。今後はそのような出題も期待したい。

問1 穀物の利用に関して、世界各地域の傾向性を踏まえて飼料用途もしくは食料用途であるかを、資料から読み取れる傾向性と結び付けて判断する問題である。地域と飼料、食料を選択させるためやや難しいが思考力を問えた問題である。

問2 フードマイレージやフェアトレード、食材の調達に関する仕組みなどの知識を用いて、具体的事象に当てはめて考察させる問題である。単に名称のみの知識を問いがちな題材であるが、知識を使って考えさせる工夫された出題になっている。平易な問題である。

問3 世界の都市の人口増加に関して、世界各地の傾向性と表から読み取ることができると傾向性とを結びつける問題である。また、人口増加傾向の都市でみられる問題をあてはめさせる2段階のプロセスが必要な問題であったが、難易度は標準的である。

問4 自動車保有台数と窒素酸化物排出量に関して、表と日本、アメリカ、ポーランドの傾向性、経済の変化とを結びつける問題である。日本、アメリカは経済が成熟し自動車の保有台数の伸びが鈍い一方で、ポーランドは経済成長中であるため自動車生産台数が増加しているといった概念知識を必要とする問題である。やや難しいが、思考力を問えている。

問5 ①②は、鉱産資源に関して資料から読み取れる技能を問うた選択肢である。③は資料から考察される社会への影響を問うた選択肢である。④は、資料に基づかない知識を問う選択肢になっており、資料を生かし考察させる選択肢になればと感じられる。難易度は平易。

問6 世界各地の文化について、地図と文章をもとに地点を特定させる問題である。難易度は平易。大問の最後に今後の展望などを問う設問があるとより良くなると思われる。

第5問 北海道苫小牧市とその周辺に関する地域調査の問題である。地理院地図を用いた読図や、各種統計データを活用した資料の読み取りなど、従来の出題傾向を踏襲した問題構成となっている。昨年、新傾向としてみられた2段階で解答を導かせる問題は姿を消し、センター試験時代のオーソドックスな形式に回帰している。いずれの問題も、基本的な知識・技能を問う設問であり、難易度は適切である。

問1 苫小牧市周辺の景観の特徴を判定する問題。選択肢の指示に従い、地図上に身を置いて考えれば、正解は容易。なお、地図中の等高線の標高が記載されていないのが気になった。

問2 過去の地形図を比較しながら、河川の流路の変遷が起きた要因を答える問題。河川の成り立ちや海岸線付近の潮の流れの特徴、季節変化など、基本的な知識で選択肢が絞れる。

問3 苫小牧港と室蘭港の特徴について、会話文の内容の正誤判定をする問題。会話文の内容については、提示された図表を読み解けば、解答は容易である。

問4 問3の会話文の内容がヒントとなっているものの、苫小牧市の産業の特徴や北海道における位置づけなどを理解していないと、各項目の比率の組み合わせ判定にやや戸惑った受験生も多かったかもしれない。

問5 写真を比較しながら、その地区の特徴を判定する問題。例年と同様、写真が提示されて

はいるが、それぞれの説明文を読むだけで事足りてしまう。さらに言えば、抽象的な表現よりも、冒頭の図1に位置を示し、地図と有機的に結びつけるなどの工夫があってもよかった。また、図6の年齢別人口構成のグラフが、左右を男女の比率で表す形式で、経年変化を表現していた。混同を避けるために、これとは異なる形で表現した方がよかったのではないか。

問6 地域の課題について話し合った会話文の空欄補充の問題。提示された図を参考に読み解けば、解答は容易であろう。

### 3 総評・まとめ

小問ごとにみると、資料を提示しその読み取りや地理的な見方・考え方を問う問題が多かった。単純な読図のスキルや地理的見方を問うだけでなく、スキルと思考力を複合的に問う問題も目立って増えているように感じた。大問単位でみると、分野や問い方、問いたい学力が重ならないようマトリックスを作成して慎重に配置していることが伺える。高い見識と時間を掛けていると思われ、このような努力に敬意を表したい。

共通テストを改革することによって、高校地理教育を改革するというのは本末転倒であると考えますが、共通テストが高校現場に大きな影響を与えていることは否めない。二十年前の受験生が地理を受けて帰ってくると、「習っていないところが出題された」と言っていた。現在そのようなことを言う受験生は殆どいない。これは地理は暗記科目だという誤解を長い年月をかけて払拭してきた成果であろう。

### 4 今後の共通テストへの要望

共通テストで気になった点も指摘しておく。ここ数年の傾向であるが、図表を用いた出題が増えている。今回は図表等の番号で数えると38点に及び、図表を用いない出題は1問しかない。このような出題が続くと受験生の情報処理速度を測っているような気がする。地理の評価とは、「地理情報の処理過程」にあると言ってしまうればそれまでだが、市民社会を構成する一員としての資質を考える端緒になるような問題も増やして欲しいと願っている。

入試センターは新しい方向性を示しつつ、現場の実情を考慮しながら、入試作成を進めてきたように感じている。しかし、入試センターの考える問題の方向性と現場教員の考える問題のイメージには若干のズレがあるように思える。2022年度より新しい学習指導要領が実施され、地理総合がスタートする。地理総合の出題は地理Aの流れを受けたものになるだろう。今後の発展を期待したい。



## 地 理 B

## 1 前 文

本試験地理Bの小問数は全体で31問となり昨年からさらに減少した。60分の解答時間を考えると1問ほぼ2分となり、十分な思考の時間が用意されている。それぞれの小問は大問によって括りがなされているが、小問自体はほぼ完全に独立したものとなっている。大問としての内容の一貫性や統一性はあるが、一連の流れで解答することは出来ないため、小問ごとにロジックを立て、思考力を問うようになっている。共通テストになった昨年は従前にはない解答方法もいくつか見られたが、今年は、二つの事象などについてそれぞれの大小や多少、対比など組み合わせて $2 \times 2 = 4$ 通りの選択肢から選ぶ形式が多く(10問)、さらにこれの変形で一方の事象を3通りに分類して $2 \times 3 = 6$ 通りの選択肢から選ぶ形式(2問)が主流となった。これらの出題においては二つの地理的な事象や概念をクロスして答えることで、それぞれの間の関連を考えさせることになり、地理的な見方・考え方を引き出す方法となっている。組み合わせを解いていく感覚は、例えば数学の因数分解や二元一次方程式を解く感覚に近いものを感じる。この他の解答方法では従前から多用されている3つの組み合わせで6つの選択肢からなる問題(7問)である。順序や大中小など一つの事象の内部的な構造を問う出題で利用されることが多い。大学入試共通テストの地理の出題はこうした組み合わせによる解答が主流となっており、このような解答形式が地理的な見方・考え方を要求する方法の一つになるなど、思考力を求める出題となっている。作問には大変な労力がかかるが、教育現場での定期考査作成においても地理の良問の作成方法の一つの技法の提示にもなる。

## 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 例年、世界地図や仮想大陸など、世界全体を大観するような出題がみられたが、今年は各地域の自然環境についての問いがほとんどであった。そうした中で問4はオーストラリアの気温や降水量を大観させる良問であった。また地理において、地域を比較し考察する学習は、重要だと考える。問1、問2のような地域比較の観点は大事にしたい。大問の後半では自然災害に関する出題が2問みられた。自然災害の理解においては自然環境の理解は重要である。しかし自然災害を扱う観点としては、それ以外にも社会条件や防災対策などの視点も重要である。自然災害の出題では、このような分野も含め、バリエーションをつけた出題を望みたい。

問1 大陸棚の分布を問うているが、訴求ポイントは海溝の位置に気づけるか、すなわち狭まるプレート境界の分布の理解である。東南アジアは分かりやすいが、中央アメリカのアとイの違いはわずかで、受験生は判別しにくかったのではないか。

問2 二つの河川の比較問題となっている。取り上げられた二つの河川はそれほどなじみのある河川ではないので、ヨーロッパ中部の地形を概観させる出題となっている。ポー川の源流はイメージしにくかったのではないだろうか。

問3 流域ごとの植生に関する出題。流域図と植生図を重ね合わせた図が出題された。受験生には見慣れない図だったかもしれないが、各流域の気候がイメージできれば難しくない。GISが普及することにより、2枚の地図を重ね合わせて切り抜くことや、流域の植生割合を算出することもできるようになってきた成果であろう。

問4 オーストラリアの気温と降水量に関する出題。気候分布の基本的原理とオーストラリアの自然環境を大観させる良問と判断したい。解法は様々だが、例えば①図で大陸内部にプラスの閉曲線があるのは降水量ではありえないとか、④図で高緯度側にプラスがみられるのは気温で

はありえない，など着眼点を探せるかがポイントである。

問5 アフリカの自然災害に関する出題。解答に当たっては，アフリカの地体構造や気候の知識が必要となる。難易度は標準的である。

問6 日本の自然災害に関する問題である。日本の気候理解を前提に，降雨災害や雪崩がいつ頃，どのような地域で生じるかを考察させている。基本的な問題である。

第2問 資源・エネルギーに関する問題。持続可能な資源利用の探究をテーマにして，図表やグラフの読み取りを通じて，基本的な知識を幅広く問う問題である。本大問はSDGsを意識しているが，他の大問でもSDGsの概念を展開してよいのではと考える。一方，センター試験や前回の共通テストでみられた農業や工業，貿易に関する問いが乏しく，「資源と産業」分野のなかで出題部分が偏っている。知識を問う問題が多く，思考力・判断力を問う問題や昨年度みられた理論（共通テスト(1)：工業立地論，共通テスト(2)：農業立地論）をもとに活用する問題が少ない。全体としてやや易である。

問1 石炭と石油の産地および生産の特徴に関する問題。炭田・油田の読み取り，石炭・石油の特徴の選択のいずれも平易な問題であり，大学受験の問題であることを踏まえると，出題方法にもう一工夫欲しい。

問2 人口増加とエネルギー消費量増加の関連についての問題。地域の類推，アジアの1人当たりエネルギー消費量の増加の読み取りのいずれも平易な問題である。一人当たりエネルギー消費量が増えた背景を問う要素や，アフリカのエネルギー消費量が伸び悩む背景を問う要素があると，思考力を問うこともできたと思われる。

問3 一人当たりGDPと一人当たり二酸化炭素排出量の関連についての問題。具体的な国名を出さずに，一般化された特徴をもとに，グラフの読み取りを用いて類推させる問題。一人当たりのGDP（X軸）もしくは一人当たりの二酸化炭素排出量（Y軸）だけで解答できてしまう。2つの指標が活用できるような問い方が求められる。難易度は標準的。

問4 化石燃料と再生可能エネルギーの発電量の割合から，環境負荷について考えさせる問題。eとgは表の読み取りのみで判断できるが，fは該当する国の総人口を踏まえて考えさせる問題で，標準的な難易度の問題。

問5 森林資源について，森林面積，木材輸出額，木材伐採量から，国と使用用途を類推する問題。四つの指標を1枚の図にまとめているのは，これまでのセンター試験や共通テストでは見られず，目新しい方法である。多角的な観点から考えさせており，地理的思考力を問う良問。木材伐採量の指標がなくても解けてしまうため，木材伐採量の指標を活用できる選択肢があれば，さらに思考力・判断力を問うことができたと思われる。難易度は標準的。

問6 持続可能な資源利用に関する模式図をもとにした問題。昨年度と同様に，高校での探究型授業を意識した図で，大問のまとめを意識した出題。出題形式は新傾向だが，問われている内容は個別的事象の正誤であり，知識を問うレベルにとどまっている。まとめを意識した図であることから，これまでの小問とのつながりを意識してほしかった。この形式は，今後の大学入学共通テストの傾向となるのだろうか。昨年度にも述べたが，模式図全体を活用した問いや探究学習の位置づけとするなど，出題方法にもう一工夫欲しい。

第3問 村落・都市と人口の変化に関する大問である。写真・地図の比較，大都市と他地域との関係性の比較，国の人口の比較，出生率と死亡率の比較というように，単なる知識問題に留まることなく，他の指標や地域と比較することによって正答を導く，地理的な思考力が求められる問題となっている。全体として良問が多い。

問1 新旧の空中写真の比較により，村落の変化を読み解く問題。対象地の砺波平野は，典型的

な散村の事例として有名な場所ではあるが、単に散村の形態を問うものではなく、圃場整備による土地区画や道路の変化、新興住宅地の形成といった、散村の中での地域の変容について問うている点では、一步踏み込んだ問題と言える。③について砺波平野全体としては人口増加しているわけではない。このことを知っている受験生には違和感があるかもしれない。

問2 公共サービス施設について条件を提示し、立地を考えさせる問題。メッシュマップで人口密度の高低を表し、さらに市町村の境界線によって中心部か辺縁部であるかを類推させる。その地図上にプロットされた位置関係から施設の種類を読み解く。常識にプラスして、施設の数や立地の特性を類推させる力が求められる。

問3 複数の指標から、大都市内部におけるジェントリフィケーションがみられる地区を推測させる問題。約20年前の貧困率から、以前は衰退地区で再開発の可能性のある居住区、富裕層になり得る対象者（高学歴）の居住地、賃料の増減で富裕層が流入した地区が分かる。市の中心部に近く、この条件に全て当てはまる地区が対象地区と判断できる。ジェントリフィケーションの内容をよく理解していること、また、提示されている地図の年次変化に注意が必要であり、思考力が問われる良問である。

問4 ヨーロッパの主要都市と他地域との関係性を、航空便の旅客数の内訳から考えさせる問題。現代世界の経済・社会的な結びつき、および旧植民地との関係性という二つの指標の組み合わせを考えねばならず、答えを導き出すまでに時間を要する良問である。

問5 シンガポールとドイツの人口ピラミッドの比較であるが、これをさらに国全体と外国生まれに分けて考えさせている点では目新しい問題と言える。ドイツが日本と同様、高齢化が進んでいる点、外国生まれでは年少人口が少なく、生産年齢人口（働き盛り）の多さ、シンガポールでは女性（家事労働者）の割合の多さから判断できる。

問6 4カ国の出生率と死亡率の推移を約20年単位でみるという問題。どのような国を取り上げるかが問題の質と難易度を左右する。特徴の明確な4カ国を取り上げており、基本的な問題といえる。

第4問 ラテンアメリカに関する出題。前半Aは、自然と社会に関して4問、後半Bはチリとニュージーランドに関して2問出題された。基本的な知識をいかして資料をもとにその場で考察する問題構成で、全体として標準的な難易度の問題であった。

問1 河川流量に関する出題である。出題された河川は二つで、図と流量の大小を問われ、その組み合わせを選択する構成であるが、実質は2択の問題である。赤道の位置やラテンアメリカの気候区分が理解できていれば、解答しやすい問題である。

問2 ラテンアメリカの主要な国の、エネルギー源別発電量の割合に関する問題である。年間降水量が多く、大河のあるブラジルで水力発電がさかんである知識があれば、他国の状況を知らずとも選択肢をしぼることができる。再生可能エネルギーについては、設備投資に資金がかかることもあり途上国では割合が高いとは考えられないことや、原油産出国の知識等があれば、解答することができる。受験生のさまざまな知識をもとにグラフを読み取り解答する、良問といえる。

問3 ブラジルの農産物の図をみながら、文章を読み、誤りを選択する問題である。ラテンアメリカに関する細かな知識がなくても、正しく図を読み取ることができれば、容易に解答できる。センター試験地理Bで頻繁にみられた出題形式である。

問4 アルゼンチン、ブラジル、ボリビアのGNIに関する問題である。図の縦軸、横軸を正しくよみ、最貧国の一つであるボリビアやラテンアメリカで人口最大のブラジルといった知識があれば、解答しやすい問題である。

問5 センター試験地理Bで頻出であった比較地誌を彷彿させる、解答はチリのみ当てはまるもの、ニュージーランドに当てはまるものをそれぞれ選択する構成で、容易。異なる二か国の、共通点や相違点を問うという点は評価できるが、解答の方法はもう一工夫あっても良かったのではないか。

問6 チリとニュージーランドの貿易に関する統計資料をみながら、チリと西ヨーロッパに当てはまる組み合わせを選択する問題である。鉱産資源の輸出に関する知識および輸出先との関係を時系列で考察することも求められ、思考力を問う良問といえる。

第5問 (地理Aと共通のため省略)

### 3 総評・まとめ

地理的な見方・考え方を求めるためには、データや図表の提示が不可欠である。その中でも特に地図は地理的な見方・考え方を一層際立たせることができる。GISの進展で多様なデータソースから直接地図を作製することが可能となり、地図を用いた多様な問いかけがされるようになっている。出題に際して空間データは重要な役割を担っている。地理院地図や国土数値情報、e-statなどを利用した出題が7問あった。共通テストでの出題によって、高等学校の地理の教育現場でもこうした空間データの扱いは推進されることになり、安全・安心で豊かな社会生活を実現するうえで重要な「地図とGIS」の活用は進展していくだろう。

### 4 今後の共通テストへの要望

空間データの存在は偏りがあるため、そのことが出題へ影響を及ぼすということは避けなければならない。しかし、空間データの整備は国際的にも進展している。日本の地理院地図にあたる官製Web地図サイトがある国もあり、国内の地形図の出題で培った作問技法の応用も期待できる。15万人が受験する地理Bでの出題は、地理教育におけるパイロット的な役割を担っている。すでに多彩な出題がなされているが、さらなるアイデアや工夫を期待する。



## ② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

TEL 03-3946-9668

## 地理A・地理B

## 1 前 文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教員を中心として構成された研究組織で、会員は年一回の研究大会と年二回の会報の発行を軸に研鑽を重ねている。それだけに、大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という）の問題には強い関心を持っており、毎年のセンター試験実施後の検討会に引き続き、共通テストについても検討会を設け、さまざまな角度から意見交換を行っている。

今年度は、共通テストへ移行して2年目の出題であった。地理Bの地誌の大問のB部分において昨年度共通テスト(1)にはなかった比較地誌の出題が本試験で復活するなどの変化もあったが、地理A、地理Bともに、大問数や構成に大きな変化はなかった。また、試行調査以来出題されてきた学習の過程を意識した場面を設定した大問の出題が今年度もみられ、こうした点も定着したものと思われる。小問では、知識・理解をもとに思考力や判断力を働かせて解答する問が多く出題されたこと、組合せ選択の形式のものが多かったこと、文章や文章の下線部についての正誤判定を求める出題が少なかったことなどが昨年度と同様に目立った。こうした点等に注目しながら、以下に本会の意見・評価を述べていきたい。

## 2 試験問題の程度・設問数・形式等

## (1) 試験問題の程度について

今年度の共通テストの平均点は、地理Aで51.62点（前年度共通テスト(1)との比較で-8.36点）、地理Bで58.99点（同一-1.07点）となり、地理Aでは小問3問程度の難化、地理Bではほぼ難易の違いはなかった。全体として、これまでのセンター試験や昨年度の共通テスト同様、高等学校までの学習内容に概ね沿った小問が圧倒的に多く、学習範囲を逸脱した難問や奇問がほとんどみられなかった点は、高く評価したい。

地理Aでは、共通テスト初年度の昨年度と同じく、資料が豊富に示され、中には複数の資料を照らし合わせる必要がある小問もみられた。また、組合せ選択による小問が昨年度に続き多く、これも解答に時間を要する原因となった。資料に丁寧に向き合えば、問われている内容そのものは標準的なものがほとんどであったが、高い知識レベルを必要とする小問も見受けられた。地理Aでは、知識の有無に特化せず、資料の読み取りや活用、思考・判断をとまなう問の数を増やすような作問を引き続き求めたい。しかし、いたずらに資料の提示数を増やすのではなく、資料数を吟味し、場合によっては解答数を減少させるなどして、解答時間にゆとりを持たせた上で、じっくりと問題に向き合うような作問をお願いしたい。

地理Bについては地理Aと同様に、参照すべき資料は多かったものの、今年度も試行調査に比べ精選された印象である。しかし、高得点者の割合が、地理歴史3科目で比較すると圧倒的に少ない点は、今年度も課題のまま残されることとなった。提示された図や表などの資料をもとに思考・判断するといった資料の読み取りや考察の過程を重視する問が作成されることは、地理的な見方・考え方を問うものとしては必要不可欠である。しかし知識問題となることを恐れ、読み取

りや考察の過程を重視しすぎ、基礎的な内容よりも、初見とは言えないもののやや詳細な知識を伴うものを題材に作成される傾向がみられる。例えばヨーロッパの河川に関する地形について問う際には、今年度に用いられたセーヌ川やポー川ではなく、学習機会が多いライン川やエルベ川などの河川を扱いながら問が作成されることを願いたい。

今年度は日本史Bの平均点が大きく下がったため、地理Bの方が平均点が高かった。しかし、昨年度に引き続き世界史Bとの平均点差は大きかった。また、地理Bでは高得点を望めないとの例年の声は、今年度も多く聞かれた。地理Bでは、一定の知識レベルが要求される中で、提示された初見や初見に近い図表や地図、設問文などを通して思考・判断する小問が多い。そのため、歴史科目と比べて短時間で解答にたどり着けるような小問は極めて少なく、解答に際し多くの時間をかけて考えることになる。その上で、異なる内容と考えられるような複数の事項について検討し解答する2×2の4択等の組合せ選択の小問が多い。こうしたことが、高得点者の少ない要因であることは、これまでも指摘し続けてきたことである。次年度以降は、地理Bを学習した生徒が、しっかり学習をすれば満点に近い得点がとれるような問題作りを切に願うものである。

## (2) 設問数や大問の構成、形式について

大問数は、地理Aも地理Bも5問で昨年度からの変更はなかった。また、小問数は地理Aで30問と変わらず、地理Bで一つの小問を二つに分割したものを含め31問とわずかに減少した。また、大問ごとの小問は、地理A、地理Bともにすべて6問ずつで、昨年度と変わらなかった。小問数はセンター試験時代よりも減少したものの、地理A、地理Bとも、今年度も地図、グラフ、表、写真などを含めた資料の提示数が多く、時間はぎりぎりで見直す余裕はなかったと思われる。小問数のさらなる削減を切望したいが、少なくとも今年度の小問数が維持されることを望みたい。

大問の構成では、昨年度共通テスト(1)と比べて、地理Aの第1問、第4問のタイトルがそれぞれ変更されたが、問われた内容について大きな変化はなかった。また、第2問では「食文化」と題し限定された分野が問われた昨年度とは異なり、「世界の生活・文化」と題された中で幅広く問われた。地理Bでは試行調査や昨年度共通テスト(1)と同じく「比較地誌」の大問はみられなかったが、本年度は、本試験において大問中のBパートとして出題された。なお地誌については、「系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題を含めて検討する」との出題方針示されていたが、そうした問は小問レベルにおいてもみられなかった。「地域調査」の大問については、今年度も地理Aと地理Bで共通であり、これまでと変化はなかった。

問題の形式については、昨年度と同様に1.「組合せ選択」の小問が非常に多くみられること、2.地理A、地理Bともに地図や図表・グラフなどを含めた資料が多用されていることが指摘されたが、今年度も変わらなかった。なお、昨年度指摘された3. GISについては、本年度は特に意識的に多用されることはなかった。また、一昨年度まで指摘が続いていた、4.地理A、地理B共通の地域調査の大問で設問文が特に長いとの指摘については、本年度もあまりみられなかった。以上の点について以下に詳しく述べる。

1.について、解答に時間を要する原因の一つである6択以上の「組合せ選択」の形式は、今年度も地理Aで9問、地理Bで11問出題され、内8択が地理A、地理B共通問で1問、地理Bで2問みられた。この他に、当てはまる図とともに文中の空欄に適語を入れるなど、複数の事項についてそれぞれ判断し選択する2×2の4択となっている「組合せ選択」の小問が、地理Aで10問、地理Bで7問みられ、本年度も「組合せ選択」の小問が非常に多かった。「組合せ選択」の問は、定番の形式として受け入れざるをえないが、作問上、組合せではない4択にしにくいなど致し方ない場合を除き、安易に多用することがないよう強く要望したい。2.については、地理A(地図・図15, うち地形図1, 地理院地図により作成されたもの5, 表4, 写真・絵・イラスト5, グラフ

10), 地理B (地図・図15, うち地形図1, 地理院地図により作成されたもの3, 表6, 写真・絵・イラスト2, グラフ14) で, 例年通り地図や表などを読み取り思考・判断する小問が多数みられたが, 中でもグラフの提示が大幅に増加したことが印象に残った。地理である以上, 適切に地図や図表を読み取る技能は重要であり基本的には歓迎したい。ただし, 高等学校までの学習を終えた生徒が理解に時間を要するような図表が多数出題されることがないように配慮をお願いすると同時に, グラフを含め地図や図表がこれ以上増えることがないようにお願いしたい。なお地図については, 地形図, 地理院地図, 国土数値情報など多様な地図が用いられたが, 本年度はGoogle Earthについては扱われなかった。地図から地形を読み取る技能については, また地形図の読み取りは, 地理院地図で示されたものが地理Aで出題されたが, 例えば第5問において苫小牧市周辺の地形景観について読み取らせ正文を選択させるなど, 地理Bにおいても出題が望まれるとの意見もみられた。3.について, GISを用いて作成された図は, 本年度はやや少なかったものの, 今後も出題数が増加するだろうとの意見が多くあり, GISを用いて作成された様々な図に慣れておく必要があると感じる。4.について, 今年度の地域調査の大問は, 昨年度と同様, 設問文の長さや図表が精選された印象が残る。来年度以降もそうした作問の継続をお願いしたい。

### 3 「地理A」について

今年度も, 各小問に図や表, 写真などを含めた豊富な資料が提示され, それらの資料が提示されず設問文だけが提示された小問は30問中1問にとどまった。また, 組合せ選択の小問が今年度も, 30小問中19問を数え, 昨年度に続き解答には多くの時間を要した。これらの点は, 昨年度共通テスト(1)よりも難化した理由として考えられる。しかし, 基礎的な知識・理解をもとに思考・判断する学習の過程を意識した問が多く, また, 細かな知識レベルを前提とした難問もなく, 概ね適切なレベルに作問されており, そうした点への評価は高い。共通テスト初年度の平均点は, センター試験最終年度の昨年度よりもやや易しかった。難易度の調整については, 少なくとも昨年度と同程度となるよう是非お願いしたい。

第1問 「地図の読み取りと活用, および日本の自然災害」 昨年度共通テスト(1)とは異なり大問タイトルに「自然災害」が加えられた。「現代社会における地図と地理情報の活用」と題され, 様々な地図資料が大問中に示された昨年度に比べると, 地図や地理情報に関する内容が前面から後退し, 自然環境に関する大問との印象が強くなったが, 自然環境の理解には地図が有用であることを再確認することができる大問であった。また, センター試験での出題が多くみられたメルカトル図法等の世界図に関する問は, 今年度も出題されなかった。

問1 地形図(地理院地図)の読み取りに関する易問。

問2 フェーン現象に関する小問で, これも易問。地図の読み取りも含まれ工夫されている。

問3 行政における新たな支所の立地候補地点に関する小問で, 標準的な難易度。提示された図から支所の立地候補地の違いによる住民サービスの違いについて考察させる問で, 地域の課題解決に向け構想する場面が設定されている。良問として評価したい。

問4 火山災害の危険性について提示された2つの資料から地点による災害や危険性の相違について考察する組合せ選択の小問。衛星画像と3Dモデルの重ね合わせ図が学習の過程を意識したものとして評価できる。

問5 丘陵地等の住宅造成における盛り土と切り土に関する小問。身近に潜む災害の危険性を題材としておりこれも評価できる。

問6 防災・減災の取組みについて述べた文の正誤を判定する易問。ただし, 水田の遊水地としての利用に疑問を感じた受験者もいたのではないかと思われる。

第2問 「世界の生活・文化」 食文化をテーマに生徒の学習過程を想起して作成された前年度共通テスト(1)とは異なり、センター試験において例年出題されてきた生活全般を問うものとなった。標準的な難易度の問が多いが、学習の範囲外と考えられる詳細な知識を含む設問が見受けられた点は改善を願いたい。

問1 ジャガイモの生産量と1人当たり年間消費量について示された図を読み取って述べた文の正誤判定を求める小問。4つの中から誤りの文を選択することは容易だが、イギリスに関して述べた文は単独であれば、「初めて」や「定着」などについて正誤の判断に迷う。

問2 家畜の利用に関する易問。年降水量と気温の年較差が示されたグラフと家畜利用に関する文との組合せ選択で、工夫された問となっている。

問3 3つの地点における生活や産業にみられる風の影響について図中の地域と説明文とを組合せ選択する小問で、標準的な難易度。ただし、イランでの家屋の構造に関する内容は学習の範囲外であると考えられる。

問4 アラビア半島の集落における生活の特色についての小問で、易。

問5 ヨーロッパの言語と宗教に関する小問。写真だけを提示した中でサグラダファミリアが立地する地域での言語と宗教の組合せを問うており、難易度は高い。写真がスペインのサグラダファミリアであり、カトリックの教会であるという知識を当然のものとする作問には、批判の声も大きかった。

問6 オーストラリアの多文化主義に関する小問で、標準的な難易度。近年定番の国全体と国内の一部地域との特色の違いという、スケールを変えた中での地理的事象の現れ方の相違を問うものとなっている。

第3問 「東アジア」 生徒の学習場面を想定し資料を提示しながら設問が進む形式。地理Aの2単位の学習においては地誌的な学習が十分に行われていない場合が多い。そうした中では、系統的な地理学習において学んだ内容をもとに判断していく問が求められる。しかし、6問中4問が産業等に関する統計資料から当てはまる国名や指標を判断し組合せる単調な作問であり、また地理B的な問の連続であったとの声も聞かれた。

問1 図中の4地点について示された月平均気温と月降水量に関するグラフから該当する地点のものを選択する小問で、難易度は標準的。グラフは雨温図やハイサーグラフではなく、最暖月・最寒月平均気温と最多雨月・最少雨月降水量だけが示されたもので、第2問の問2においても、同様に年降水量と気温の年較差だけが示されたものであった。これらの示し方は、雨温図やハイサーグラフからそれらのものを読み取って考察するよりも見るべきポイントが絞られ難易度は低くなるものの、地理的技能の育成という観点からは、雨温図やハイサーグラフを直接示して、各都市の気候を概観させたり、見るべきポイントを受験者に直接読み取らせたりした上で考察させる設問があってもよかったのではとの意見も聞かれた。

問2 東アジア3地点とそれぞれの麺類について原料や周辺の自然・社会環境が述べられた文との組合せ選択の小問。地理Aの生活文化らしい問で、易問。冷麺の材料がそば粉であることは知識としては細かい。

問3 日中韓3か国における小麦と米の1人当たり年間供給量の変化を示したグラフから日本と小麦とを選択する組合せの小問。初見の資料で、やや難。

問4 日中韓3か国における乗用車と野菜の貿易に関する小問で、日本が明示されており判断は容易。

問5 日本と韓国、台湾、中国との間のサービス貿易に関する小問。台湾が明示されたことで容易な組合せ選択の問となっている。文化・娯楽は高校生にも人気の韓流が意識された問で、



好感が持てる。

問6 韓国, 台湾, 中国からの訪日旅行者に関する小問。台湾が明示された2つの指標から中国を選択し組合せる間で, 難易度は標準的。

第4問 「地球的課題」 今年のタイトルから「世界の結びつき」が除かれ「地球的課題」となり, 世界の結びつきに関する内容は出題されなかった。そのため, 食料問題から先住民に関する問題まで地球的課題に関する幅広い分野からの出題がみられる大問となった。今年度も各小問に資料が用いられ資料の読み取りや考察が求められたが, 大問全体としては, 昨年度ほどには解答に時間を要することはなかったと思われる。

問1 食料用途以外での穀物利用の増加に関して, 先進地域での飼料用途の増加を問う易問。

問2 食材の重量と産地を示した資料をもとに, フードマイレージや食材の調達に関して述べた文の正誤を判定する小問で, これも易問。フードマイレージを取り上げた視点は良いが, 国内の移動の縮小も必要とのメッセージも欲しかった。

問3 メガシティ数と将来の予測値を示した表中に適する地域とメガシティの現状や課題について示した文中に適する文との組合せ選択の小問で, 難易度は標準的。従前のセンター試験であれば, 表中の空欄と適する地域との組合せ選択が問われるだけの形式が多かったが, 共通テストへの移行後は本問のような形式が増加しており, 小問あたりの解答時間が増している。時間を要しても深い考察を求める意図であれば歓迎するが, 小問数の削減や他の小問での資料の精選が求められる。

問4 3か国における人口当たりの自動車保有台数と窒素酸化物排出量の変化を示したグラフから統計年次の前後と国名を組合せて選択する小問。EU加盟等による東欧諸国の経済発展が理解できていないと, やや難しい。

問5 世界におけるタンタルと金の生産の分布を示した図を読み取って述べた文中の下線部の正誤を判定する問。タンタルという聞きなれないレアメタルを扱っているが, レアメタルの分布や利用についての基礎的理解があれば解答でき工夫されている。

問6 3地点と各地点における先住民の暮らしの変化について述べた文との組合せ選択の小問で, 標準的な難易度。

第5問 「北海道苫小牧市とその周辺の地域調査」 地域調査に関する大問は, これまでも地形図や写真を含め図表など資料を多用した小問が並んでおり, それらの資料を読み取りながら思考・判断していく構成は, 今年度も同様のものとなった。また, 3つの間で用いられた対話文も長いものは少なく, 昨年度同様地域調査の大問にしては, 時間がかからず解答できたと考えられる。なお, 作問中には5万分の1地形図が用いられたため, 昨年度と異なり本年度は地理Bにおいても地形図が扱われることとなった。近年の地域調査の大問では, 大問中の設問のすべてが, 調査対象となる地域を題材としたものであることが多い。そのため, 苫小牧市の製造品出荷額の推移といった詳細なデータを扱う問がみられ, 難易度が増している。地域の詳細な特色を扱うのではなく, 幅広く他地域と比較し対象地域の特色を大観する問の作成が望まれる。

問1 地理院地図により作成された図の読み取りについての文の正誤を判断する間で, 易。読み取り内容がやや単純すぎたと思われる。

問2 提示された地形図から流路の変化について考察した文中の空欄に当てはまる適語を選んで組合せる問。地形の形成について考察させる良問と評価する声上がる一方で, 地形の形成について扱うのであれば扇状地や氾濫原など日常の学習機会が多い地形を用いる必要があるとの声も上がった。

問3 苫小牧港と室蘭港について示された資料を読み取って述べた文の下線部の正誤を判定

する間で、易。

問4 苫小牧市の製造業の変化について示された表中の3つの業種の組合せ選択の問で、難易度は高い。苫小牧市の主要産業が紙・パルプ産業から石油化学産業へと変化したという詳細な知識を問うていると批判があった一方、前問の会話文の文脈で軽工業から重化学工業への変化を判断できるため、考えられた問であったとの意見もみられた。

問5 苫小牧市の2つの地区における人口ピラミッドの変化についての小問。提示された資料から読み取って判断する問で、思考・判断を問う良問。難易度も標準で評価したい。

問6 苫小牧市の人口増減を示した図の読み取りと、提示された図から今後の施策を考える問で、易。地域に関する地理的な課題の解決に向けて構想する力を求めた問で、評価したい。

#### 4 「地理B」について（地理Aとの共通問題を除く）

大問構成と内容については、第3問が都市、人口である点なども含めて、昨年度と同様であった。小問数は1問減少したが、図や写真、グラフ、表などの資料が豊富で、組合せ選択の小問も昨年度とほぼ同数の18問を数え、解答に多くの時間を要した。しかし、昨年度センター試験から共通テストへの変化を意識して作り込み過ぎたと思われるような自然環境を扱った第1問のような大問はみられなかった。全体を通して解答そのものに迷う難問は、みられなかった。しかし、センター試験最終年度よりも難化した昨年度からの易化はみられず、同じ地理歴史科の世界史Bよりも、7点近く平均点は低かった。また、これまでと同様に成績上位層が高得点を取りにくい状況にも変化はなかった。来年度以降の改善を是非お願いしたい。なお地理Bでは、すべての大問中で世界図は1枚しか提示されなかった。現代世界の諸事象を世界的な視点で理解することは必要不可欠であり、世界図を提示しての作問が少な過ぎるのではないかとの意見も聞かれた。

第1問 「世界の自然環境や自然災害」 世界図は用いられず、すべての設問が比較的狭い地域を扱うものとなった。そのため、世界の中の各地域の特色ではなく、各地域の中のさらにスケールを小さくした各地域の特色を問う設問が多くみられ、難易度の高い大問となったと考えられる。思考・判断や考察の過程を重視するあまり、結果的には、スケールの小さな細かな地域の特色に関する詳細な知識・理解を求める設問がみられる点は、改善の必要があると思われる。

問1 東南アジア周辺と中央アメリカ周辺の大陸棚の分布に関する小問であるが、海溝の分布に関する知識を問うもので、難易度は標準。プレート境界や新期造山帯の分布域という知識から思考・判断させるものとなっているが、こうした問い方や、中央アメリカ・カリブ海地域を扱っての出題には批判の声も大きかった。

問2 ヨーロッパの河川に関する小問で、2つの河川の河口の地形と年平均流量と河道の標高の割合の相違を問うている。図中ではAとされたセーヌ川の河口がエスチュアリーとなっているということ以外、両河川に関する知識は詳細で、難易度は高い。この問では、知識がより定着していると考えられるライン川あるいはドナウ川とエルベ川においても、同様の視点からの問の作成が可能と思われる。受験生に過度な知識の負担を求めないようお願いしたい。

問3 アジアの4つの河川流域における植生の分布に関する小問。メコン川と長江の常緑広葉樹と落葉広葉樹の割合の違いについては判断しづらく、やや難。

問4 オーストラリアの1月と7月の気温と降水量の変化に関する小問。目新しい図の示し方は正解率を下げるものとなったが、内陸部において夏に気温が上昇することに着眼できれば解答は容易で、思考力を問う良問としたい。

問5 アフリカの地形と気候を大観する小問。北部の新期造山帯と東部の大地溝帯といった地

形の特色と、熱帯低気圧が与える低緯度地域への影響を理解していれば容易。難易度は標準。

問6 日本の自然災害に関する問で、梅雨末期の土砂災害の多発や、春先の雪崩を判断できれば、これも難易度は標準。

第2問 「持続可能な資源利用」 昨年度共通テスト(1)のような産業に関する各分野からの出題とは異なり、エネルギー資源の利用と環境への影響に特化した大問となった。SDGsに関する知識や思考・判断は重要な事項ではあるが、受験者のこれまでの学習に応える意味でも、産業の各分野からの幅広い出題を望む声は大きい。今年度の本試験地理Bの全大問中最も難易度が低いと思われるが、世界史Bとの平均点の差を考慮するならば、全大問とも本大問程度の難易度での作成が望まれる。

問1 石炭と石油の資源分布に関する小問で、基礎的な知識を問う易問。

問2 世界の地域別の資源利用の推移に関する資料の読み取りの小問で、この問も平易。

問3 経済の発展に伴う二酸化炭素排出量の増加について、国名を明記せず問う小問。資料から読み取った3か国の経済発展の程度と各国の産業の状況が示された文との組合せ選択で、論理的に思考・判断する工夫された問となっている。難易度としては標準的。

問4 5か国の発電量に占める化石燃料と再生可能エネルギーの割合が示された表を読み取って述べた文の下線部の正誤をそれぞれ判断する組合せ選択の小問。文中の「最も大きい」や「最も小さい」が、表中の5か国の中でのことであるのか世界全体の中でのことであるかが設問文からは判断しづらい中で、各文の正誤を判定させている点には、疑問の声があった。難易度としては比較的平易。本問を表中に空欄で示した3か国の組合せを問うだけのものとし、他の問にかける時間を増加させた方が良かったのではないかとの声も聞かれた。

問5 3か国における木材輸出額、森林面積の減少率、木材伐採量、薪炭材と用材の割合という4つの指標を1つのグラフで示した小問で、平易。グラフの示し方に工夫がみられる。

問6 循環型社会へ向けた取り組みについての構想を問う小問で、学習指導要領が求める課題を解決する活動に関わる問で、ポスター発表を意識し工夫されている。時間を要さずに解答が可能な問で、得点率は高い。こうした問が増加すれば、世界史Bとの平均点が縮まり、高得点者も増加する。

第3問 「村落・都市と人口」 「村落・都市と人口」のみからの6小問で昨年度同様、「生活文化」の小問はみられなかった。形式的に1つの問の中で2つの事項についての判断を求める2×2での4択の小問がなく受験生への負担が少ない点や、地理的な見方・考え方を問う良問がみられる点は評価できるが、難易度が高い点は評価しがたい。

問1 空中写真で示された砺波平野における社会や経済の変化について述べた文の下線部の正誤を判定する小問。「あぜ道」を想起できない受験生もいたと思われるが、平易な問である。「ほとんど」という修飾語が入る選択肢が正答となることには疑問の声もあった。

問2 人口分布が示された地図上における3つの公共施設の立地を選ぶ組合せ選択の小問。ごみ処理施設が取り上げられた点も含め、地理的な見方・考え方を問う工夫された良問と評価したい。難易度はやや高い。

問3 提示された4枚の地図からジェントリフィケーションがみられる地区を判別する小問。文字的な知識ではなく、地図化された資料からジェントリフィケーションの本質を問うており、難易度は前問に続きやや高いが、これも地理的な見方・考え方を問う良問である。本試験中最も優れた問であるとの声も大きかった。

問4 ヨーロッパの主要空港におけるヨーロッパ以外の各地域からの出発旅客数の内訳を示

したグラフからパリと北アメリカを判別する問。アフリカからの到着が多い空港をパリと判断することが求められ、難易度は高い。

問5 シンガポールとドイツの国全体と外国生まれの人口ピラミッドを判別する問で、標準的な難易度。

問6 4か国の出生率と死亡率の推移を示したグラフからマレーシアを判別する問で、やや易。

第4問 「ラテンアメリカ」 ラテンアメリカを地誌的に問う大問。ラテンアメリカ全体について問うAパートと、ラテンアメリカのチリと他地域のニュージーランドとを比較するBパートに分けての出題。センター試験では大問レベルで扱われたものの昨年度共通テスト(1)では出題されなかった比較地誌に関する設問がみられた。地域を比較する視点は重要であり、復活を歓迎したい。また地理Bでは、2度の試行調査でも昨年度の共通テストでも扱われなかった発展途上地域からの出題となったことは、地理が、地理歴史・公民の他科目と比較して発展途上地域に関する扱いに特色がある点からも評価したい。発展途上地域が扱われる際には難易度も高くなりがちであるが、標準的な難易度であった点についても評価したい。

問1 2つの河川の流域における降水の特色を問う小問で、両河川の平均流量の多少の判別はやや難。

問2 各国のエネルギー源別発電量割合を示したグラフからエネルギー源を判別する小問で、ブラジルだけに着目できれば容易。

問3 ブラジルの農産物の輸出に関して示した2つのグラフを読み取って述べた文の下線部の正誤を判定する小問。相対的数値と絶対的数値の読み取りに関して誤る容易な問。

問4 3か国間の経済格差と各国内の経済格差について問う小問。アルゼンチンとブラジルの判別が難しく、難易度は高い。本問の図を用いるならば、グラフを読み取ったり各国の差異が生じる背景について述べたりした文や文中の下線部から正文か誤文を選択する形式がよかったのではないと思われる。

問5 チリとニュージーランドの自然環境について1つの設問中に2つの解答を求める小問で、いずれの問も易。目新しい形式であるが、チリとニュージーランドそれぞれに解答を求める必要性はなかったとの声が上がった。

問6 チリとニュージーランドの貿易に関する問で、難易度は標準的。個別の国との結びつきではなく、広範な地域との結びつきを問うた点には好感がもてる。

第5問 「北海道苫小牧市とその周辺地域調査」 第5問の評価は地理Aでの記述の通り。

## 5 要 約

本試験の地理A・地理Bを小問単位で検証した結果、今年度も、高等学校までの学習内容に沿った小問がほとんどで、学習範囲を大きく逸脱した難問や、奇問はみられなかった。こうした点については高く評価したい。また、思考・判断を重視した小問も多く、この点についても評価は高い。ただし、出題方針に示された地理的な諸課題の解決に向けて構想する力を問うものは少なく、増加が望まれる。なお、地理Bで出題されたラテンアメリカの地誌のように、学習機会が少ない地域の出題にあたっては、今年度のように知識に偏らない出題となるよう注意を願いたい。地理Bでは、今年度も、「地理は難しい」、「十分勉強したのに報われなかった」、「地理を選択すべきでなかった」という受験生の声が例年通り聞かれた。地理Bは、世界史Bや日本史Bと比較して80点以上の高得点者の割合が今年度も少なく、平均点においても世界史Bよりも7点近く低かった。地理は、初年度の共通テストでも、今年度の共通テストにおいても、地理A・地理Bともに、知識・理解をもとに思考・判断する力について十分に検証できる問題作りが行われてきており、そうした点について



の評価は非常に高い。本会は、学習の成果を踏まえた適切な設問であれば、たとえ難易度が高い問でも歓迎し、評価する。しかし一方で地理は、地理歴史科の選択科目の一つであり、地理Bが並立して置かれている日本史Bや世界史Bの度数分布と大きく異なっていることは、望ましくない。そうした点を考慮するならば、日本史や世界史と同様に、一問一答のような基礎的な知識をストレートに問う小問が増えてもよいのではないかとの声も聞かれる。来年度以降、今年度の評価を参考に、しっかり学習した生徒が高得点をとれるような作問をお願いしたい。

本会ではこれまで、1.基礎・基本としての必須な知識を整理し、それを前提に作問し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、2.授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で諸説あるような内容を安易に出題しないこと、3.専門性の高い作問者の常識と受験生のそれとの落差に留意すること、4.解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点として要望してきた。今年度は、1.～3.については、おおむね要望が叶えられた作問となった。しかし、4.については、来年度における改善をお願いせざるを得ない作問であった。

今年度も小問単位ですべての間について検証する中で、作問に関わられたすべての先生方のご苦勞を十分に感じ取ることができた。改めて敬意を表するとともに、来年度以降も、われわれの手本となる問題の作成が行われることを期待して講評を終わる。